

京都大学大学院文学研究科 21世紀 COE プログラム  
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

# 規範性と多元性の歴史的諸相

## Canone

## Newsletter

No.2

2003/04/25

## Contents

---

### 研究会

近代日本画における「仏教」主題の継承 / 2

西欧中世の大学における学問の規範性と多元性 / 3

デューラーとティツィアーノをめぐって / 3

今後の活動予定 / 5

お知らせ / 6

---

## 研究会報告

---

研究会

テーマ

近代日本画における伝統的規範の伝承

開催日時

2003年2月19日(水)午後1時～3時

場所

京都大学文学部新館第6講義室

発表題目

「秦テルヲのモダニスト仏画」

ジョン・シヨスタック(ワシントン州立

大学大学院博士後期課程・フルブライ

ト大学院研修員・本学研究生)

明治時代から現代に至るまで、仏教に関わる主題がなおも頻繁に取り上げられ、院展や日展そしてその他の様々な公募展にもこの種の絵画がよく見られた。こうした現象については様々な解釈が可能であるが、この種の作品は当時美術展に登場してきた「古典的」な日本芸術の作例と、近代的な作品とを結びつける任を果たしていたとも考えられる。しかしながら、こうした仏教的な主題の作品は「展示絵画」として一部では評価されたが、「仏画」としては失敗しているという批評もなされた。たとえば、矢代幸雄は、狩野芳崖の「悲母観音」について、それが伝統的な仏教主題を利用しているにしても、制作の動機が真に宗教的な感情から発したものでなければ、作品としては成功していないという見解を述べている。

それでは、近・現代の宗教的な芸術作品が、芸術的な側面と宗教的な側面の両方から成功するためには、何が必要であろうか。この問題を、秦テルヲの作品、特に1937年に制作された「仏化開縁の図」を取り上げて考察してみる。この作品は、注文者の手紙によれば、ある信心深い老女の見た夢に基づいているが、構図には「二河白道図」や「地獄草子」「地獄極楽図」などの伝統的な仏画の影響があることは明らかである。しかしながら、画面の中には近代的な添加物も見られる。たとえば、様々な「主義」(「唯物主義」「個人主義」「民主主義」「世界主義」など)が書かれた抗議運動の幟を持って、浄土に渡ろうと渴望する人々からなる群衆が描かれている。こうしたものは老女の夢に出てきた可能性もあるが、少なくとも一部は作家の自伝的要素を含んでいるのではなかろうか。したがって、この作品を読み解くためには、テルヲの人生及び芸術活動を知る必要がある。そして、こうした試みを行った結果、この作品はテルヲが伝統的な宗教絵画を参考にしながら、個人的な寓話を創り出したものであるという結論を得た。すなわち、「モダニスト仏画」には、テルヲの「仏化開縁の図」に見られるように、伝統に基づく宗教的な要求と、モダニズムの創造的な要求という両者が併存することが必要なのである。

## 研究会

## 開催日時

2003年3月12日(水)午後1時～6時

## 場所

芝蘭会館

## 発表題目

「西欧中世の大学における学問の規範性と多元性　イスラーム哲学の受容と存在の一義性」

山内志朗(新潟大学人文学部教授)

## 概要

発表者山内氏は次の順序で、西洋中世のスコラ哲学に対するイスラーム哲学の影響を主張された。

1. 13世紀における神学教育(テキストとしての『命題集』と大学)
2. 神学の扱い(トマス・アキナスとドゥンス・スコトゥスの相違)
3. <存在>の一義性
  - 《一義性概念》
  - 《潜在的に含む》
  - 《形相的区別》と《自同的述定》

より具体的にはアヴィケンナの『形而上学』5巻に登場する「馬性の格率」、すなわち「馬性は馬性にすぎない」という存在論の主張が、スコトゥスにおいて神学と形而上学との接合を可能ならしめたのである。つまり、形而上学の対象としての「存在としての存在」と神学の対象である「個体本質としての神」とが、「潜在的に含む」という仕方で結びつけられことになっているのである。

研究発表ののち、川添信介によるコメントがあり、その後参加者との活発な討論が交わされた。

## 研究会

## テーマ

デューラーとティツィアーノをめぐって

## 開催日時

2003年3月15日(土)午後2時～5時

## 場所

京大会館

## 発表題目

研究発表:「規範としてのデューラー: ルドルフ二世の宮廷における北方ルネサンスの受容と翻案」

平川佳世(近畿大学講師)

展覧会報告:「ティツィアーノ展(2003年2月19日～5月18日 於:ロンドン・ナショナル・ギャラリー)」  
 劔持あずさ(美学美術史学DC2 現在 山口県立美術館学芸員)

## 概要

## 研究発表

ルネサンスのドイツを代表する画家アルブレヒト・デューラーの諸作品は、制作当初より常に多くの模倣を引き起こしていたが、とりわけ、16世紀末から17世紀初頭にかけての北方ヨーロッパでは、デューラー作品の模倣、借用、翻案がにわかに集中する、いわゆる「デューラー・ルネサンス」と呼ばれる現象が確認される。本論では、この「デューラー・ルネサンス」の中心地の一つであり、最も質の高い作例を輩出した神聖ローマ皇帝ルドルフ二世のプラハの宮廷に目を向け、ルドルフ二世によって収集されたデューラーの作品が、宮廷で活動する画家たちによって翻案されていく過程を、具体的に考察した。

稀代の芸術愛好家であるルドルフ二世は、質、量ともに他に類をみないデューラー・コレクションを形成していたが、ルドルフ二世の宮廷における「デューラー・ルネサンス」の性格は、こうした極めて質

の高い数多くのデューラーの真筆作品の存在に規定されていると考えられる。例えば、デューラーの油彩画を購入できない一般的な美術愛好家の間では、絵画風の彩色を施したデューラーの版画、あるいは、デューラーの版画を賦彩模写した油彩画が流行していたが、こうした実践はプラハの宮廷においては、ルドルフが収集したデューラーの素描を絵画化する実践へと変貌を遂げている。ヤコブ・フフナーヘルの《ペリシテ人と戦うサムソン》等、描かれた個々の作品を分析すると、ルドルフ二世という洗練された愛好家のもとでデューラー素描の絵画化を行う画家の側にも、それを文字通り賦彩模写するだけでなく、自らの創意を加えて翻案しようという意識が生まれているのがわかる。また、ヤン・ブリューゲル(父)の二枚の板絵で構成されたデューラーの素描《大カルヴァリオの丘》の保存箱においては、扉の開閉という行為を通じて古の画家と現代の画家の競合を鑑賞者が享受するという独特の鑑賞形態が認められるが、これは、バイエルン公マクシミリアン一世が所有していたデューラーの板絵《ルクレツィア》にも共通するものであり、ルネサンス絵画に対するこの時代特有の鑑賞形態といえる。クラナハ作《ユーディット》やレオンハルト・ベック《竜を退治する聖ゲオルギウス》など、ルドルフ二世が収集した他のドイツ・ルネサンスの画家たちの作品にも、ハインツやスプランゲルの手により、翻案作品あるいは対となる作品が描かれており、古の画家の作品に現代画家の作品を対比させることでより複合的な享受形態を生み出そうとする態度がみてとれる。

総じて、ルドルフ二世の宮廷における北方ルネサンス美術の翻案・競合は、手本自体の質の高さと翻案作品のそれが拮抗し、鑑賞者の心を強く魅了する稀有な例といえよう。

## 展覧会報告

2003年2月19日より5月18日まで、ロンドン、ナショナル・ギャラリー、セインズベリー館において、『ティツィアーノ展』が開催されている。カタログによれば、本展覧会開催の主旨は、ロンドン・ナショナル・ギャラリーが所蔵する十一のティツィアーノ作品を、意味のある流れの中に位置付け、よりよく理解する機会を提供することである。さらに、本展覧会には最大の目玉として、かつてフェラーラ公アルフォンソ・デステの書斎「カメリーノ・ダラバストロ」を飾っていた絵画作品が、約400年ぶりに集まるといふ企画も用意されている。

展覧会会場は六室にわかれており、展示構成は、大きく次の五つのグループに分けることができた。すなわち、1510年代の初期作品(第一室、二室)、「カメリーノ」の再構成(第二室)、1530年代の作品(第三室)、1540年代の肖像画(第四室)、晩年の作品(第五室、六室)である。

このような展示の中で特に目を引いたのは、やはり「カメリーノ」の再構成である。第二室の一画を使って、今回再現された配置は、左壁に《バッカスとアリアドネ》(ロンドン・ナショナル・ギャラリー)、正面壁に左から《アンドロス島の人々》(プラド美術館)《神々の祝祭》(ワシントン・ナショナル・ギャラリー)、ドッソ・ドッシによる失われた「ウルカヌスのいるバッカナーレ」(実際の展示では空き場所)、右壁に《ヴィーナスへの奉獻》(プラド美術館)であった。このうち、《神々の祝祭》は、ジョヴァンニ・ベリーニにより描かれた後、他作品との統一感を出すためティツィアーノによって加筆されたものである。しかし会場の混雑も手伝い、再現された「カメリーノ」の「統一感」をじっくり味わうことは

困難であった。展覧会の目玉であるならば、「カメリーノ」の部分を明確に区画するなど、より独立した形での展示方法が検討されてもよかったのではないだろうか。出品作品の主題および年代は、ティツィアーノの画歴全般からバランスよく選別されており、総出品数は四十三点であった。従って展覧会全体としては、画家の幅広い制作活動を包括的に紹介しており、美術館側の主旨にかなっていたといえる。しかしその結果、逆に展覧会全体を通じたテーマが見えにくくなってしまった。目玉である「カメリーノ」の再構成のみに焦点を絞る、または特定の主題を集め様式の変遷を追うなどして、全体のテーマを限定させたほうが、より統一感のある展覧会になったと思われる。

---

## 今後の活動予定

---

### 4月26日(土)研究会

場所

京大会館 午後1時～

研究発表

小原 琢

「トマスにおける分離靈魂の認識仕方について *praeter naturam*としての*modus cognoscendi*」

藤本 温(名古屋工業大学)

「意図と結果 - Thomas Aquinas, ST, II-II, 64, 7 -」

### 6月21日(土)研究会

場所

京都大学文学部新館第1講義室

午後2時30分～

研究発表

増記 隆介(大和文華館学芸部員・神戸大学大学院文化科学研究科客員助教授)  
「我が国における普賢十羅刹女像の成立と展開 「和装本」を中心に -」

調査報告

皿井 舞(本学非常勤講師)

「メトロポリタン美術館、ボストン美術館、クリーブランド美術館調査報告」

---

## お知らせ

---

### 新規研究会メンバー

小林道夫（大阪市立大学文学研究科教授・西洋近世哲学）

深谷訓子（本学研究科 DC3・オランダ美術史）

皿井舞（本学非常勤講師・研究会補佐員・日本美術史）

### 所属の変更等

劔持あづさ（旧：D2・研究会補佐員 新：山口県立美術館学芸員）

---

### （後記）

ようやくニューズレター 2 号をお届けすることができました。今号の内容は、昨年度 2 月から 3 月にかけて行われた研究会の発表要旨や、今後の活動予定、新規メンバーの紹介等になっております。

今年度 10 月初旬には、学の制度と規範をテーマとして、哲学・美術史合同のシンポジウムを開催する予定にしております。詳細につきましては、次号でお知らせできることと思っております。あわせて、当研究会のウェブサイトをご覧いただくと幸いです。

（研究会リーダー内山勝利）

---

### 研究会連絡先

〒 606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科  
美学美術史学研究室 担当 皿井 舞  
075-753-2752  
<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/canone/>

